
シンポジウム 3

排尿障害・女性泌尿器；Next 10 Years

司	会	秦	聡	孝 (大分大)
		羽	賀	宣 博 (福岡大)
演	者	松	岡	和 福 (福岡大)
		李		賢 (九州大)
		篠	原	麻由香 (大分大)
		福	本	哲 也 (愛媛大)
		山	本	恭 代 (徳島大)
		齊	藤	源 顕 (高知大)

司会のことば

産業医科大学教授の藤本先生が大会会長である本学会のテーマは Urology ; Past and Next 10 Years です。今回の司会のことばの執筆にあたり、こちらのテーマを、もう一度自分なりに考えてみました。アインシュタインの名言にあるような、“Learn from yesterday, live for today, hope for tomorrow. The important thing is not to stop questioning.” に近いイメージでしょうか？また、私なりには、“温故知新” という風にも解釈いたしました。（藤本大会会長の意にそぐわないかもしれませんがご容赦ください。）まさに泌尿器科の学会にふさわしく大変素晴らしいテーマであるように感じました。また、どなたかがおっしゃっていたように、本学会のこちらのテーマには、present（現在）が見当たりません。そのことがかえって、present を際立たせているようで、過去を振り返らず、未来に惑わされず、ただ現在を一生懸命頑張るようにと、藤本先生からの熱いメッセージのようにも感じた次第です。

さて、今回私たちに与えられたテーマは、排尿障害・女性泌尿器；Next 10 Years です。

排尿障害、女性泌尿器とたった2つの言葉ですが、扱う疾患は大変広く、複数の学会が設立され、病態の解明や、新規治療法に取り組んでいる分野です。テーマの選択には、秦教授と相談し、10年後に特に光り輝いていると思われる分野とさせていただきました。

まず、福岡大学の松岡先生からは、前立腺肥大症の手術治療に関してお話しいただきました。今後10年は、前立腺肥大症患者が増加し、特に高齢の患者の増加が予想されます。高齢の患者さんは、フレイル・サルコペニアを有するため、なるべく短期間の入院が必須条件です。さらに、抗血栓療法を受けている患者さんも多いため、こういった患者さんに対して、レーザー治療の有用性を示されました。泌尿器科専門医を取得前の大変若い先生ですが、将来が楽しみです。

次いで、九州大学の李先生からは、低活動膀胱・排尿筋低活動の診断と治療に関して、ご講演を賜りました。低活動膀胱は、近年クローズアップされてきている疾患概念です。排尿症状がメインの疾患ですが、詳細な病態解明が未だなされておらず、また有効な治療法がないのが現状です。排尿筋低活動に関しては、尿流動態検査に基づく診断となり、大変侵襲的かつ、すべての施設で実施できるわけではありません。したがって、尿流動態検査を行わずに診断する試みがなされています。李先生からは、関連施設からのビッグデータに基づいた、尿流動態検査を用いない低活動膀胱診断に関する研究をお示しになられ、大変興味深く拝聴しました。

大分大学の篠原先生からは、尿失禁に対する新規再生医療の開発へ向けた外尿道括約筋研究への取り組みに関するご講演を賜りました。大分大学の三股前教授や住野先生が中心に以前から取り組まれていた継続的な研究かと拝察します。私自身が排尿に関する基礎研究を行って

いた際に、眩いばかりの素晴らしい研究であったと、学会発表や特別講演で拝聴していたのを思い出しました。その時より、さらに研究が進歩しており、これからの発展がますます期待されました。また、篠原先生は子育てをしながら、診療と研究の三刀流で頑張っていることを秦教授から伺いました。これからの活躍を祈念いたします。

愛媛大学の福本先生からは、骨盤臓器脱手術の過去未来—安全なロボット手術を目指して—というテーマでご講演を賜りました。紀元前の子宮脱手術は、患者さんを逆さにして吊るし、揺らす手術を行っていたというのは驚愕でした。そして、それから2000年以上を経て、ロボット手術の時代となりました。ロボット手術は安全で確実なのはもちろんのこと、術者の負担の軽減、そして、術者教育にも有用であるのご講演を賜りました。まさか、ロボットを用いて手術をするような時代になるとは、だれが想像していたでしょうか。

徳島大学の山本先生からは、尿失禁手術で健康寿命を延ばすというタイトルでご講演を賜りました。山本先生には、10年後の尿失禁に関する手術療法に関するお話だけでなく、ご自身が経験された、尿失禁手術の詳細なデータをお示しになられていました。また、トラブルシューティングに関してもお示しになられ、女性泌尿器科の診療に携わっている先生方にも大変有用であったと拝察します。当施設（福岡大学病院）では、女性泌尿器

科部門が立ち上がっておらず、今後の重要な課題と位置付けています。女性泌尿器科医を目指してもらうために、若手医師の心に刺さるキーワードをお伺いしました。尿失禁などの症状が改善した際に、患者さんが大変お喜びになるのが、ご自身にとって望外の喜びであり、その喜びは、ほかの疾患では味わうことはできないとご返答いただきました。

最後に、高知大学の齋藤教授からは、脳から見た排尿制御ということで、齋藤先生の教室で近年熱心に取り組まれている、ボンベシン、硫化水素、一酸化炭素などのガスが中枢に作用し、排尿を制御しているという基礎研究に関してご講演されました。排尿に関する制御は、これまで液性因子がメインに研究されてきましたが、こちらの研究はガスが排尿を制御するという、斬新かつ革新的で、そしてユニークな発想に基づき行われています。講演時間が大変短かったので、もっと長い時間お話を頂戴できればよかったと思いました。

今回のシンポジウムは、内容も多岐にわたりましたが、ご講演頂いた先生方におかれましても、専門医取得前の若手医師から、教授の先生まで、そして、子育てをされながら研究される女性医師に至るまで、大変多岐にわたっていました。私たち泌尿器科医が目指すダイバーシティを具現化したセッションであると思われました。是非この後続く総説のパートもご一読いただければ幸甚です。